

【一】次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

それでは、生き物の種という観点から、地球規模の環境汚染について考えてみましょう。

私は以前、「このままでは人類は近いうちに必ず滅亡する」と書きました。この表現は実に重要で、決して「地球環境が破滅する」といつているのではありません。人類が消え去るだけのことなのです。

もちろん、その結果として、^①人類に寄りかかって生きていた生き物連中も滅びます。もちろん中には形を変えて^②しぶとく生き残るものもいるでしょうが、親を失った幼児のようなもので、生きていくのは大変でしょう。

ドブネズミだってゴキブリだって、人間がいなくなれば、滅びはしなくても生活の質はかなり下がるはずです。私たちの食べ残しをあてにできない以上、荒野をさまよって餌を探すしかないのですからね。

しかし、この話、人類とそこに寄りかかっている以外の生き物にとつては、実に喜ばしい話なのです。人間と相對する生き物は、人間が減びてくれれば^③我が世の春が来ます。たとえば、マグロやクジラは自分を襲う天敵がいなくなるので、七つの海を^aセイフクし、支配できるでしょう。これもすべて「生物進化」の一環です。

いきなり「進化」などという生物学用語が出てきました。環境汚染を考えるには絶対に必要な観点なので、ここで、しっかり頭に入れておいてください。さもないと、明日の人類は救えても、明後日の人類は滅亡することになりかねません。

生物進化は、ときにはかなりドラマチックな変化を地球上にもたらします。

【A】今、人類が生きていられるのは、大昔、全地球規模で起きた、ある生き物たちによる環境破壊のおかげなのです。

私たちは大気中の酸素を吸って生きています。^bセイジョウな大気とは、森林浴にあるような新鮮な酸素に満ちあふれた空気のことであり、逆に酸素を絶たれれば短時間で死んでしまいますから、こんなありがたいものはありません。

【B】地球が誕生したころ、大気中に酸素はほとんどなかったのです。いや地球だけでなく、全宇宙にあるほとんどの惑星や衛星の大気はそんなもので

す。成分は40億年前の地球と同じようなものだと考えられているのです。

【C】、酸素が気体で存在する地球はかなり異常。それどころか、全宇宙規模でいえば、酸素こそが最悪のゴミであり、毒ガスであり、大気を汚す最悪の環境汚染物質なのです。

なぜ地球の大気だけに酸素が増えたのか。犯人は生き物です。

地球に生まれた生き物は、昔から大気中にあつた炭酸ガスやいろいろなガスをどんどん消費し、バクバクと乱獲し、そして、その排気（老廃物）として酸素を大気中にバラまいていきました。当然、「繁殖の結果として地球がどうなるか？」などと考えない生き物たちだったので、やがて大気中の酸素濃度がどんどん濃くなってしまします。^④これが悲劇の始まりでした。

なにしろ酸素は自分たちの吐き出したもの、つまり廃棄物だから、彼らにとっては毒です。自分たちを害する汚染物質といつてもいいでしょう。そんなものが大気中に^cジユウマンしてしまつたら、滅亡するか、あるいは生き物の主役の座から^d滑り落ちるしかありません。

それにしても、それまで^⑤（ ）顔に地球を支配してきた生き物が減びていく理由の多くが、自ら垂れ流した廃棄物だという事実は、^⑥因果応報、自業自得といった言葉を思い起こさせます。初期の生き物にとつての酸素は、まさにそんな悪魔のガスでした。

大量の酸素の発生（排出）は、生き物が行った最大規模の環境破壊ですが、それによつてすべての生き物が滅びたわけではありません。その環境に合わなくなった生き物が勢力を失っていく一方で、必ず、次の主役が登場してきます。汚染空気に頼る生き物が進化してくるのです。

人間もその中のひとつ。言葉は悪いですが、^⑦昔の生き物の排泄物を^⑧頼みに生きています。これは生物界において決して特殊なことではありません。

たとえば、動物の糞を食べる生き物はたくさんいます。ハエがそうだし、フンコロガシなんかは糞をダンゴにして、大事に運んでいきます。つまり、排出した側にとつては汚くいやなものであつても、別の生き物にとってはありがたい命の綱なのです。

そう考えていくと、今の環境保全運動というのは、人間の価値観を中心にした、ずいぶん身勝手なものだということができます。

「クリーンな地球を守れ！」「地球にやさしく」「地球を救おう」と叫びな

問6 傍線④「これが悲劇の始まりでした」とありますが、なぜ「悲劇」と言えるのですか。次の空欄に入る適切な語を、本文中から十字で抜き出し、答えを完成させなさい。

生き物が によつて滅びていくから。

問7 傍線⑤は、「いかにも自分の所有物だというような顔つき」という意味の慣用表現です。空欄に入る適切な言葉を、ひらがな四字で答えなさい。

問8 傍線⑥「因果応報、自業自得」とありますが、これらの四字熟語の意味に最も近いことわざを、次の中から選び、その記号で答えなさい。

ア 泣き面に蜂 イ 身から出たさび
ウ 楽あれば苦あり エ 棚からぼた餅

問9 傍線⑦「昔の生き物の排泄物」とは、具体的には何を指しますか。本文中から一語で抜き出し、答えなさい。

問10 傍線⑧「頼み」とほぼ同意で用いられている表現を、傍線⑧以降の本文中から五字以内で抜き出し、答えなさい。

問3 傍線②「しぶとく」の意味として最も適切なものを次の中から選び、その記号で答えなさい。

ア ねばりびよく イ ふてぶてしく ウ すえながく エ てがたく

問4 傍線③「我が世の春」とは、どのようなことをたとえていますか。次の中から適切なものを選び、その記号で答えなさい。

ア 誕生期 イ 成長期 ウ 安定期 エ 最盛期 オ 停滞期

問5 空欄A～Cに入る適切な語を次の中からそれぞれ選び、その記号で答えなさい。

ア ところで イ たとえば ウ もちろん エ つまり

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

次は石田衣良の『火を熾す』という小説の後半部分である。主人公の光弘がブレイマスター（公園で活動するボランティアの一つ）として公園で焚き火の世話をしている。そこに、しばらく会社に行くことができない治朗という青年と、登校できない小学生の男の子（壮太）が二日間にわたって焚き火に当たりに来ていた。本文は三日目の朝のことである。

つぎの日は重い曇り空だった。

空は鉛色に鈍く光って、地面には雲の影も落ちていない。雨降りの前日よりも冷えこんで、気温は零度を二、三度うわまるだけだった。光弘は公園の近くのスーパーで、パンとステーキ肉を買っていた。またあのふたりはきつとくるだろう。そんな気がしてならなかった。前日、男の子と治朗はすっかりあたりが暗くなるまで冒険広場において、しつかりと後片づけをして帰っている。

光弘が公園に着いたときには、治朗と男の子はすでに石を組み始めていた。普段はせいぜい二段くらい低い低火だが、ふたりで工夫してひざくらいの高さまで丸く炉を組んでいた。治朗が明るい声でいった。

「おはようございます。この子は林壮太っていうんです。ほんとと同じで不登校だそうです」

「おはよう、そうか」

光弘は不思議だった。^①自分の目から見ると筋のよさそうな人間ほど、不登校だったり、長期休職をしていたりするのだ。今の日本で人並みに普通の組織に籍をおくのは、それほど困難なことなのだろうか。もう自分は一生組織の世話にはならないだろう。それがありがたくもあり、治朗や壮太にはすまない気にもなった。^②治朗が光弘に目配せしていった。

「壮太、焚き火を自分で熾してみよう。最初はどうするんだっけ」

壮太の声はひどく細く頼りなかった。

「火の点きやすい新聞紙を丸めます」

新米のブレイマスターが質問した。

「つぎは？」

「えーっと、細かな木切れをのせる」

だったら、ほんとと同じだよ」

確かに男の子のいうとおりである。頭で考えれば、学校にも会社にもいったほうがいいだろう。誰でもそんなことはわかっている。けれど、身体が拒否反応を起こしているのだ。人間はみな頭の判断だけで生きているわけではなかった。そんなことができるなら、自分もあのまま辞めずに働いておけば、今よりはすこし生活が楽になっただろう。贅沢は望まないが、すくなくとも長年連れ添った妻を毎年海外旅行に連れていくくらい余裕はできたはずだ。光弘は黙ってしようと、心に決めた。もう自分は引退した人間だ。これからは若い人同士で、考えて未来を決めていけばいい。

治朗の声は自嘲をふくんで苦かった。

「そうだね、ほんとえらいそうなことはいえない。会社が怖くて、あそこの人間関係が怖くて、二週間も休んでいるんだもんなあ。もう出世コースはないんだろな、きつと」

長い人生のなかで、二週間くらいなんだといったかった。光弘は黙って鈍を振るい、薪をつくった。太い木の枝が^④はぜて、ばちばちと火の粉が飛んだ。治朗と壮太はあわてて、身体に飛んだ火の粉を払っている。いきなり笑いだしたのは治朗だった。

理由は光弘にはわからなかった。突然始まった笑い声は、焚き火の炎に負けないほどの勢いでおおきくなって、しまいには腹を抱え、目に涙を浮かべながら^⑤青年は笑った。

「ははは、おかしいよな。ぼくは一昨日ここにくるまで、もう死んでしまおうって思っていた。会社にもいけないダメ人間なんて生きていてもしかたないって。それが、この公園でうまいイモとうまいステーキサンドをくつたら、気が変ったんだ。今、見ただろ。火の粉が飛んだくらいで、熱いっておおさわぎだ。死ぬんなら、ちよつとくらい火傷なんてなんでもないはずなのに」

治朗が焚き火越しに光弘を真剣な目で見つめていた。それから、男の子に視線を移している。

「なあ、壮太。ぼくが会社にいけるようになったら、壮太も小学校にいったかい」

光弘は驚いていた。なにをいいたすのだろうか。治朗は光弘にうなずいていった。

「そうだ。それで最後におおきな薪を組む。一番大切なことはなんだっけ」

男の子の顔には笑みが浮かんていた。歌うようにいう。

「煙をできるだけすくなくして、火のなかに空気の通り道をつくってやること」

「正解、じゃあいっしょに焚き火を熾そう」

人に教えられたことを、つぎの日には別な人に教える。まるで自分の人生のようではないか。大切なことをひとつかふたつ、つぎの世代に伝え死んでいく。人間などそれだけでいいのではないだろうか。自分は子どもをもたない。金もたいして残せないだろう。だが、どれほど豊かな人間でも、人に残せるものには限りがある。

^③もう、このふたりはだいじょうぶだろう。そう思って、光弘は別な炉を組み始めた。

〈中略〉 ここで三人はステーキ肉とパンを焚き火で焼いて食べる。

食事のあと、あたりはすっかり暗くなった。三人は思いおもいの場所で、焚き火の暖をとっている。壮太は一日の重労働でさすがにくたびたようで、地面に段ボールを敷いて横になっていた。光弘がぼんやりしていると、壮太と治朗がなにか熱心に話をしていた。学校とか会社とかいう言葉がきこえてくる。焚き火には新しい木は必要なかった。あとはきれいに灰になるまで、この炭を燃やしきつてしまえばいい。まだ三十分はたっぷりかかるだろう。

「やっぱり小学校にはいつておいたほうがいいと思うよ。お母さんが心配する気もちは、よくわかる」

治朗の声だった。男の子にむかって^a諭すようにいう。

「でも、ぼくは学校が苦しくって。クラスで座つてると、息ができなくなっちゃうんだ。ほんとにへたくそな焚き火の煙をずっと吸わされているみたいなんだよ」

壮太の声は泣きだしそうだった。光弘は自分の最後の会社員時代を思った。確かにあそこは、焚き火の煙のように空気の悪いオフィスだった。壮太が重ねていった。

「ぼくにはそういうけど、治朗兄ちゃんだって、会社休んでいるんでしょう。」

^⑥磯谷さん、ほんとと壮太の約束の証人になってください。ぼくはこれまで自分が損をするから会社になくちやいけいない、ほかの社員に後れをとるから会社になくちやあって、ずっとあせっていたんです。でも、どうしてもダメだった。だけど、自分のためじゃなくて、誰か人のためだったら、会社にもいけるような気がしてきました」

六十年以上生きてきたが、光弘は証人を頼まれたことなど初めてだった。「弱つたな。わたしはただのブレイマスターで、人さまの人生をどうこうするなんてできないよ」

壮太が右手にキャベツの芯をもったまいった。
「そんなことないよ。磯谷のおじさんは焚き火の名人だし、料理の名人だし、ぼくはいっしょにいるだけで、すごくてのしかった」

治朗もうなずいている。
「この三日間、ほんとうにお世話になりました。ここの焚き火はほんとうにあたたかかった。ただ身体をあたためるんじゃないで、心の底まで照らしてくれる光でした。ぼくはいつか会社を辞めて、リタイアする日がきたら、磯谷さんみたいなブレイマスターになりたいと思います。まだ四十年近く先かもしれないけど、本気です」

煙が目にしみたようだった。光弘は目に涙がにじんで困った。
「明日、会社に電話して、来週から出社すると伝えます。なあ、壮太、もし兄ちゃんが一週間会社でがんばれたら、おまえも小学校いくんだぞ。約束だからな」

男の子は段ボールのうえであぐらをかき、腕組みして考えていた。しばらく炎をみつめるといった。
「わかった。なんだか怖くて悲鳴がでちゃいそうだけど、約束だから、がんばってみる。じゃあ、みんな指きりげんまんしよう」

焚き火を囲んで三人で小指を結んだ。ひとつは六十代の枯れ枝のような指、ひとつは青年の若い木のようなまっすぐな指、そして一番短く瑞々しいのは五月の新緑のようにつるつるとした子どもの指。

不思議な話だと、光弘は思った。十二月の三日間で、こんなふうに来るで他人の心が結ばれることがある。きつと焚き火の炎が人の心を溶かすからなのだろう。火には人を深いところで変える力があるのだ。光弘は追われるように会

社を辞めたあの冬を思いだしていた。あのときも毎日新たな火を熾すことで、なんとか沈みがちな心を保てたのではないだろうか。

壮太がキャベツの芯を焚き火のなかに投げこんだ。勢いよく火の粉があがり、公園の夜空に舞っていく。

「でも、ぼくが学校にもどるまでは、まだ一週間以上あるんだよね。だったら、ぼくは毎日ここにきて、焚き火を熾すよ。磯谷さんの手伝いをしたいから」

もし自分に孫がいれば、このくらいの子になっっているのだろうか。光弘は不登校の少年の顔をよく見た。煤ですこし黒くなっているが、実に利発そうな顔をした子供だ。治朗も炎で顔を赤く染めていう。

「ぼくも日曜日までは、ここにかよわせてもらいます。だけど、焚き火って、すごい力がありますね。ここにきた三日間、誰にもなんにも相談もしなかったし、ずっと悩んでいたわけでもないのに、いつのまにか自分のなかにこたえがでている。なんだか火を熾すのが癖になっちゃいそうだ」

光弘は笑って、燃えている薪の形を直した。いつも新鮮な空気を送ってやること。炎と人の心は似ているのかも知れない。だから、焚き火の熱が人にのり移るのだろう。

今年の冬がうんと寒くなるといいなと光弘は思った。そうならば、たくさんの人がこの公園に生きた炎をたのしみにやってくることだろう。^⑦光弘はじっとしていられなくなつて、手元にあった小枝を炎のなかに投げこんだ。枝先の枯葉がちりちりと丸まりながら燃えていく。焚き火に一番いい季節が始まろうとしていた。たくさんの人々が火のあたるところに^⑧ツドう冬だ。

問1 太線 a の漢字の読みをひらがなで記し、b のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線①「自分の目から見ると筋のよさそうな人間」とありますが、光弘が壮太を傍線①と同じ目線で見ている表現が本文後半にあります。その表現を5ページの本文中から十五字以内で抜き出し、答えなさい。

問6 傍線④「はぜて」の意味として適切なものを次の中から選び、その記号で答えなさい。

ア 勢いよく裂けて イ 赤く燃え上がって

ウ 積み重なって エ 折れ曲がって

問7 傍線⑤「青年は笑った」とありますが、この笑いはどのような気持ちの表現ですか。適切なものを次の中から二つ選び、その記号で答えなさい。

ア これまでささいなことと思いつめてきた自分のおろさにあきれ果てる気持ち。

イ おいしいものを食べることで心もお腹も満たされて、とても愉快な気持ち。

ウ 自分の体が心とまったく反対の反応をしてしまうことへの不可解な気持ち。

エ こだわってきたことから解放たれて、とてもすがすがしい気持ち。

オ 会社に行こうとしても行けない意志の弱い自分が、とても腹立たしい気持ち。

問8 傍線⑥「磯谷さん、ぼくと壮太の約束の証人になってください」と治朗が光弘に依頼したのはなぜですか。その理由として適切なものを次の中から二つ選び、その記号で答えなさい。

ア 成り行きで約束をしてしまったものの、また会社に行けない状態が繰り返されないよう、光弘に自分を戒めてほしかったから。

イ 火を熾す作業を通じて、殻に閉じこもらず人間対人間の付き合いができた相手として、光弘を心から信頼しているから。

ウ 自分が会社に行くことは、壮太や光弘にとっても喜ばしいことであり、世代を超えた三人の絆がより強くなるから。

エ この約束は自分と壮太にとって重大なことなので、二人の出会いのきっかけとなった光弘に責任があると思ったから。

オ 小学生の壮太の手本になろうと決心したことを強固なものにするため、光弘に自分を見守ってほしかったから。

問3 傍線②「治朗が光弘に目配せしていった」について、次の各問いに答えなさい。

【Ⅰ】治朗の「目配せ」は、光弘に黙って見ているようにという意味の合図ですが、なぜ治朗は光弘に黙って見ていて欲しいのですか。次の中から最も適切なものを選び、その記号で答えなさい。

ア 火を熾す準備をせつかく自力でしたので、このまま壮太と二人だけでやりとげたいという思いがあったから。

イ 自分だけでも、壮太ひとりの面倒くらは見られることを光弘に認めさせたいという思いがあったから。

ウ 光弘が気落ちしている様子を見て取り、ここは自分が代わりの役を買って出ようという思いがあったから。

エ 壮太ひとりでも火を熾せると気付かせることで、この子に自信を持たせたいという思いがあったから。

【Ⅱ】【Ⅰ】で答えた「思い」が報われたことを示す一文を、傍線②以降の本文中から抜き出し、始めの五字で答えなさい。

問4 傍線③「もう、このふたりはだいじょうぶだろう」と光弘が思ったのはなぜですか。次の中から最も適切なものを選び、その記号で答えなさい。

ア 手ぎわよく働くふたりに頼もしさを感じ、プレイマスターの仕事ですっかり任せられると気が楽になったから。

イ ふたりが自分たちで焚き火を熾せるようになったので、もう彼らにわずらわされなくてよいだろうと確信したから。

ウ 孤独なふたりが互いに支えあうことによって、学校や会社以外にも居場所を見つけられることが分かったから。

エ 火を熾す体験を通して、ふたりが学校や会社への不安を乗り越えて組織に戻って生きていけるだろうと判断したから。

問5 壮太にとっての小学校の様子や光弘にとっての会社の雰囲気、比喩的に表している表現が3ページ下段〈中略〉以降の本文中にあります。その表現を五字で抜き出し、答えなさい。

問9 自分に対する治朗の感謝の言葉に感激し、照れ隠しする光弘の気持ちが読み取れる表現を、傍線⑥以降の本文中から十五字以内で抜き出し、答えなさい。

問10 傍線⑦「光弘はじっとしていられなくなつて、手元にあった小枝を炎のなかに投げこんだ」とありますが、この時の光弘の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、その記号で答えなさい。

ア いままで少人数でやってきた焚き火熾しに、多くの人が参加すると思うと落ち着かない気持ち。

イ 冬になって多くの人が公園にやってくる日のことを思うと、孤独だった自分にも希望が持てる気持ち。

ウ プレイマスターとしての役割が、人に大きな力を与えていたことがうれしく、自信と喜びが湧きおこってくる気持ち。

エ プレイマスターという役割が注目されることで、仕事では得られなかった肩書きへの誇りが持てる気持ち。

問11 波線「焚き火って、すごい力がありますね」とありますが、「焚き火」の「すごい力」とはどのような力ですか。本文全体の内容をふまえて、百字程度でわかりやすく説明しなさい。